

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：84604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770277

研究課題名(和文)七世紀土器編年からみた古代宮都の変遷に関する考古学的研究

研究課題名(英文)The archeological study about the earthenware of the 7th century and the change of ancient royal palaces

研究代表者

若杉 智宏(WAKASUGI, Tomohiro)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・飛鳥資料館・研究員

研究者番号：70511020

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、これまで実態が不明であった坂田寺SG100出土土器群の全体像を明らかにし、その年代的な位置づけについても一定の見通しをつけることができた。

また、SG100出土資料と難波宮跡から出土した土器群の様相比較から、前期難波宮の主要殿舎が孝徳朝に全て完成していたかどうか、再検討の余地があることを指摘した。前期難波宮の造営過程やその年代につき、検討課題を明らかにできた点は重要である。

研究成果の概要(英文)：This research revealed the whole aspect of the earthenware that had been excavated from the pond SG100 in the Sakatadera Temple site and the approximate time it had been used.

In addition, by comparing the earthenware from the pond SG100 with the earthenware excavated from the Naniwa Palace site, I pointed out that it must be reexamined whether all main structures of the former Naniwa Palace were completed in the Kotoku dynasty or not. It is important that this research clarified some problems to be considered about the construction process of the former Naniwa Palace and the time that it was constructed.

研究分野：日本考古学

キーワード：土器 7世紀 前期難波宮 飛鳥編年

1. 研究開始当初の背景

上町台地の北端に位置する前期難波宮は、孝徳朝の難波長柄豊碕宮に比定する見解が通説となっている(1)。ただし、一部の文献史学や考古学の研究者からは、「前期難波宮=難波長柄豊碕宮」説に疑義が唱えられている(2)。このような見解の相違は、前期難波宮の定説的な位置づけを困難にしており、古代宮都の変遷や、孝徳朝および「大化改新」の評価などを考察する上で、不可避の問題となっている。

7世紀において、考古学的資料から宮都の暦年代を考える主な指標は土器であり、7世紀の畿内の土器編年は、飛鳥地域の土器を基準とする。前期難波宮に関わる飛鳥地域の資料には、坂田寺池 SG100 出土土器群があり、7世紀中頃の基準資料とされている。しかし、この SG100 出土土器群については、これまで概要が報告されているに留まり、全容が不明であることが問題となっていた。

以上のような、土器の基準資料の全体像が不明のまま、飛鳥地域の土器編年(飛鳥編年)をもとに、前期難波宮の暦年代や古代宮都の変遷が議論されている点は大きな問題であり、一刻も早く解決すべき課題であった。

2. 研究の目的

上述のような古代宮都研究における問題点の解決するため、まず、飛鳥編年の基準資料である坂田寺 SG100 出土土器群の網羅的な整理作業をおこない、全容を把握する。それをもとに飛鳥・難波地域の土器群の比較をおこない、両地域の土器群の時期的な併行関係を明らかにする。その上で、前期難波宮の暦年代観を確定させ、古代宮都の変遷史における位置づけを明らかにすることを目指す。

3. 研究の方法

本研究の進め方は、下記の通りである。

(1) 飛鳥編年の基準資料である坂田寺 SG100 出土土器群の整理作業をおこなう。その全体像を把握した上で、他の飛鳥地域出土の土器群と比較し、7世紀の土器様式における SG100 出土資料の位置づけを明らかにする。

(2) 前期難波宮の造営に関わる遺構や整地土から出土した土器群の実見調査をおこない、飛鳥地域出土の土器群との比較検討のためのデータを取得する。

(3) (1)・(2)で得たデータを比較し、飛鳥地域の土器群と前期難波宮跡出土の土器群の年代的な併行関係を検討する。その成果をもとに、前期難波宮の造営年代と、古代宮都変遷史上での位置づけを考察する。

4. 研究成果

(1) 坂田寺 SG100 から出土した土器群の整理作業をおこない、全体像を明らかにした。SG100 出土土器群の特徴は、以下のよう

とめられる。

土師器供膳具では、杯 C と杯 H が多く、杯 G は少ない。特に杯 H の多さが目立ち、土師器供膳具の4割以上を占める。

土師器杯 A がわずかながら存在している。

土師器皿 A・深皿が一定量みられる。

須恵器では、杯 H・杯 G が供膳具の大部分を占める。

須恵器杯 H・杯 H 蓋と杯 G・杯 G 蓋の比率は、前2者が若干多い。

土師器杯 C では、杯 C (口径 14.5~18.0 cm)、杯 C (口径 11.5~14.0 cm)、杯 C (口径 8.5~11.0 cm)の法量分化がみられる。口縁部が8分の1以上残り、高さのわかる個体の径高指数は、杯 C が 28.6~33.8、杯 C が 24.1~30.6、杯 C が 29.0~35.0 である。3点を除くと、杯 C のいずれもが 28.5~32.3 の範囲におさまり、ほぼ相似形をなしていることがわかる。

杯 C の調整は b 手法のものが多いが、a 手法のものもある程度存在する。また、杯 C

では、ほぼすべての個体で口縁部にヘラミガキを施す。一方、杯 C・C の調整手法は基本的に a0 手法である。

土師器杯 H は、口縁部が8分の1以上残る72点のうち、60点が9.0~11.4 cmにおさまる。これは、杯 C の口径の範囲とほぼ重なり、また、須恵器杯 H・杯 G の口径とも近似する。このように、口径 10 cm 程度の小型食器が、SG100 出土土器群の主体をなす。

土師器杯 A は、深い器形に復元できる。口縁端部の形状には、内傾するものや丸くおさめるものがあり、飛鳥以降の杯 A に一般的な、端部を内側に巻き込む口縁部形状とは異なる。外面にはヘラミガキを密に施し、丁寧なつくりである。内面の暗文は、細かな二段放射暗文を入れたもののほか、上段に乱れたループ暗文を施す個体もあり、杯 A に二段放射暗文が定着する前の様相を示している。

土師器皿 A・深皿は、平らな底部から、口縁部が丸みをもって立ち上がる形状である。口縁端部に平坦面や内傾面をつくるものが主体で、端部を内側に巻き込み肥厚させるものはほとんどみられない。内面の暗文に関しては、放射暗文に加え、ループ暗文を施すものも散見し、暗文構成が定まっていない状況が看取できる。

須恵器杯 H、杯 H 蓋、杯 G、杯 G 蓋では、一部にやや口径の大きなものもみられるが、大部分の個体の口径は概ねよくまとまる。杯 H・杯 H 蓋・杯 G の底部・天井部の外面調整は、3点を除き、確認できる個体はすべてヘラ切り不調整である。

土師器供膳具には、焼成後に施された刻書や記号の線刻が多くみられる。「卍」や「知」、「恵妙」などの刻書は、寺院との関わりがうかがえる。

(2) 坂田寺 SG100 出土土器群と、飛鳥地域出土の資料のうち、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層

(以下、灰緑色粘砂層)、および甘樫丘東麓遺跡 SK184(以下、SK184)から出土した土器群の特徴を比較したところ、下記の点が明らかとなった。

SG100 から出土した土師器杯 C は、灰緑色粘砂層・SK184 出土の杯 C より、浅いものが主体である。SG100 の杯 C ~C では、径高指数が確認できる 27 個体のうち、28.5~31.5 の範囲におさまるものが 20 個体あり、7 割を超える。灰緑色粘砂層や SK184 出土の資料には、このような径高指数の杯 C はほとんどみられず、より深い器形が主体である。

灰緑色粘砂層・SK184 の土師器杯 C では、外面調整は大部分が b 手法である。SG100 の杯 C でも、b 手法が主体であるが、a 手法のものも散見し、灰緑色粘砂層・SK184 出土資料と比べると、a 手法の割合が増加している。

灰緑色粘砂層・SK184 出土の土器群にはみられない土師器杯 A が、SG100 出土資料には少量ながら存在している。

灰緑色粘砂層・SK184 出土資料ではわずかしみられない土師器皿類が、SG100 の土器群では一定量出土しており、器種組成において、一定の割合を占める。

土師器高杯 C の杯部については、SG100 出土資料の方が、灰緑色粘砂層・SK184 出土のものより若干浅くなっている。

須恵器杯 H・杯 H 蓋・杯 G・杯 G 蓋の口径に関しては、灰緑色粘砂層・SK184 と SG100 出土資料で、分布範囲に重なる部分があるが、SG100 出土の須恵器には、前 2 者の土器群にはみられない、より小さな個体が含まれる。具体的には、口径 8 cm 台・9 cm 台の杯 H 蓋、蓋があたる部分の径が 9 cm 台前半の杯 H、口径が 9.0 cm 以下の杯 G のような小さな個体が、SG100 出土の土器群には存在する。

須恵器杯 G の底部外面調整をみると、灰緑色粘砂層・SK184 出土資料では、ロクロケズリがヘラ切り不調整より多い。一方、SG100 の杯 G では、ほぼすべてがヘラ切り不調整である。

以上、～ に示した特徴の違いを勘案すると、SG100 出土土器群は、従来考えられていた通り、灰緑色粘砂層や SK184 出土土器より新しい様相をもつといえる。土器様相の差異に着目すると、器種組成の中に土師器皿類が一定量存在する点が大きな変化であろう。飛鳥 と飛鳥 の土器様式は、SG100 とそれ以前の土器群にみられる、このような様相差を基準として区分することができる。

(3) 難波地域から出土した土器群と、SG100 出土土器群との対応関係を検討した。比較に用いた資料は、難波地域の土器編年(3)において、難波 中段階の基準資料である難波宮跡水利施設第 7 層出土土器群と、難波 新段階の基準資料である難波宮跡北西谷第 16 層ほか出土土器群である。

SG100 と水利施設第 7 層の須恵器では、杯 H・杯 H 蓋・杯 G・杯 G 蓋の受部径・口縁部径の範囲が重複する部分が多い。また、杯 H・杯 H 蓋・杯 G の底部・天井部の外面調整は、両土器群ともヘラ切り不調整が主体となる段階にあたり、共通した様相を示す。さらに、土師器の器種組成に皿がみられるようになる点も含め、両資料群の土器様相には類似性が認められる。これらのことから、SG100 と水利施設第 7 層の土器群の間には、それほど大きな時間的差異を見積もることはできないと考える。

ただし、水利施設第 7 層の須恵器杯類には、SG100 の土器群にはみられない、受部径が 13 cm 台～14 cm 台前半の杯 H や、口縁部径が 11 cm 台後半～13 cm 台前半の杯 H 蓋・杯 G 蓋といった径の大きな個体が含まれている。また、水利施設第 7 層出土資料では、杯 H・杯 H 蓋が杯 G・杯 G 蓋より多く、残存状況も前 2 者が後 2 者に比べ、はるかに良好である。一方、SG100 出土資料では、杯 H・杯 H 蓋が杯 G・杯 G 蓋より若干多い程度である。

以上のような、両土器群にみられる共通点や相違点を踏まえると、SG100 出土土器群は、水利施設第 7 層出土土器群よりやや新しい特徴をもつと判断できるが、両資料群が示す土器様相の想定年代幅については重複する部分も大きいと考える。

SG100 出土資料と難波宮跡北西谷第 16 層ほか(以下、谷第 16 層)から出土した土器群を比較すると、谷第 16 層出土の須恵器杯 G・杯 G 蓋には、SG100 のものより口径の小さな個体がみられ、大きさの縮小化が進んでいることが読み取れる。また、谷第 16 層出土資料では、杯 G・杯 G 蓋の出土量が、杯 H・杯 H 蓋より多く、さらに、脚台の高い杯 B やそれに被ると考えられる口径が 14 cm を超える蓋を含む。以上より、谷第 16 層出土資料は、SG100 出土土器群より新しい特徴を有するといえる。

(4) SG100 出土土器群の年代的な位置づけについても検討を加えた。SG100 出土資料の暦年代を考える上で基礎となる資料は、下記のとおりである。

(A) 山田寺下層 SD619・整地層出土土器
SD619 は、南門南方の整地土下で検出された大溝。『上宮聖徳法王帝説』裏書によると、舒明天皇 13 年(641)に、山田寺造営のための整地が開始された。

(B) 藤原京西三坊坊間路側溝出土土器
西三坊坊間路を埋め立て建立された本薬師寺は、天武天皇 9 年(680)に発願された。『日本書紀』によると、持統天皇 2 年(688)には、当寺にて無遮大会がおこなわれている。

(C) 藤原宮下層運河 SD1901A 出土土器
SD1901A は、藤原宮造営のために掘られたと考えられる運河である。土器とともに出土した遺物には、天武朝末年頃(682~685)の

木簡が含まれる。

また、甘樫丘東麓遺跡焼土層 SX037 出土土器が、乙巳の変（645 年）に関わる資料であるならば、それも参考にできよう（D）。

飛鳥・藤原地域出土の土器群は、山田寺下層 SD619・整地層（A）、甘樫丘東麓遺跡 SX037（D）、飛鳥池遺跡灰緑色粘砂層、甘樫丘東麓遺跡 SK184 坂田寺 SG100（水落遺跡貼石遺構周辺）大宮大寺 SK121 藤原京西三坊坊間路側溝（B）、藤原宮下層運河 SD1901A（C）の順で、土器様相の変遷が考えられている。これらを時間的前後関係に置き換えた場合、各土器群が示す土器様相に、それぞれどれほどの時間幅を想定するかで、SG100 出土資料が示す土器様相の想定年代も変わってくる。

上に示した土器様相の変遷と（A）～（D）の資料を考慮すると、坂田寺 SG100 の土器群に代表される飛鳥の始まりが、650 年代前半を遡ることはないと推察できる。その年代が、650 年代半ば以降となる可能性も十分に考えられるが、飛鳥の始まりが 7 世紀第 3 四半期のうちにあったことは確実であろう。

（5） SG100 出土土器群と難波宮跡出土土器群との比較から、前期難波宮の造営過程について、考察をおこなった。

（4）で確認した SG100 出土土器群の暦年代観は、前期難波宮造営期に比定されている難波中段階の年代推定にも関わることから、前期難波宮の造営過程を考察する上で重要である。

前期難波宮は内裏地区の南に広大な朝堂院を備えた宮殿として復元されているが、その壮麗な宮域は、朱鳥元年（686）の焼亡時の姿を示しているにすぎず、朝堂院地区を含めた主要な宮域が孝徳朝に全て完成していた、という決定的な考古学的証拠は、現段階では見いだせない。

飛鳥の始まりを 650 年代前半と考えた場合、SG100 と水利施設第 7 層出土資料との関係から、前期難波宮の造営が孝徳朝に始まったとみることが可能である。しかし、難波地域では、SG100 出土資料より新しい土器様相をもつ難波新段階においても、活発な人的活動が続いていたと想定でき（4）、飛鳥還都後も宮内の主要殿舎の造営が続いていた可能性は充分にある。前期難波宮の造営がどのように進んだのか、孝徳朝の難波宮がどのような姿であったのか、に関しては、今後さらなる検討が必要であろう。

（6）本研究において、これまで概要報告しかなされていなかった SG100 出土土器群の詳細を明らかにし、全容を公表できた点は大きな成果である。また、SG100 出土資料の年代的位置づけを踏まえ、孝徳朝の難波宮の姿や前期難波宮の造営過程について検討課題を明らかにできた点は重要である。

本研究で考察の及ばなかった前期難波宮

の詳細な造営過程や、朝堂院の成立時期などを含んだ 7 世紀における古代宮都の変遷に関する検討は、今後の課題であり、飛鳥京跡出土土器群などの資料も調査対象とした上で再考を期したい。

註

- 1 中尾芳治『難波宮の研究』1995 年
- 2 山尾幸久「「大化改新」と前期難波宮」『東アジアの古代文化』133 号、2007 年
白石太一郎「前期難波宮整地層の土器の暦年代をめぐって」『大阪府近つ飛鳥博物館報』16、2012 年
- 3 佐藤隆「難波地域の土器編年からみた難波宮の造営年代」『難波宮と都城制』2014 年ほか
- 4 佐藤隆「難波と飛鳥、ふたつの都は土器からどう見えるか」『大阪歴史博物館研究紀要』第 15 号、2017 年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

若杉智宏「坂田寺池 SG100 出土の土器群」『奈良文化財研究所紀要 2018』、2018、pp.154-165、査読無

〔学会発表〕(計 1 件)

若杉智宏「坂田寺池 SG100 出土土器群の様相」第 148 回歴史土器研究会例会、2016

6. 研究組織

(1) 研究代表者

若杉 智宏 (WAKASUGI, Tomohiro)

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所・飛鳥資料館・研究員

研究者番号： 70511020